

『日華文化交流史』に見る歴史学者・木宮泰彦の姿

——『日華文化交流史』とその時代（一）——

Kimiya Yasuhiko as a Historian on His the History of Japan-Sino Cultural Exchange
（『日華文化交流史』）

濱 川 栄

Sakae HAMAKAWA

（令和元年十一月八日受理）

抄 録

大著『日華文化交流史』から本学創立者木宮泰彦の歴史研究者としての特長と問題点を剔出した。木宮が奉じたのは徹底した実証研究であり、博搜した史料を表に整理して見やすく示す点に特長があった。『日華文化交流史』の底本で戦前刊行の『日支交通史』が日本だけでなく中国でも好評を得、数種の翻訳が出たのも、中国では散逸した史料を見ることができるといふ点が評価されたからであろう。だからこそ『日支』に未収の史料に多数接した木宮は、どうしても『日支』の増補改訂版を出したかったのである。戦禍による原稿焼失にもめげず、執念で刊行された『日華』の特長は当然大幅に増補された表になる。一方本文はほぼ『日支』の丸写しで、重大な誤記もそのまま転写するなど粗さも見える。総じて木宮の研究は概説的・平板的ではあるが、日中関係の深化に貢献したいとの意欲に満ちており、その点は継承されるべきである。

キーワード…『日華文化交流史』、『日支交通史』、実証主義、表、禅宗

はじめに

本学創立者の木宮泰彦（一八八七年—一九六九年）は、日中文化交流史、特に禅僧の交流に関する歴史研究者でもあり、『日中文化交流史』上・下（一九二六・二七年）とその増補改訂版『日華文化交流史』（一九五五年）などの名著を残したことで知られている。

しかし、戦後は本学の創立と経営に一身を捧げ尽くしたために、研究者としての新稿は一篇すらも残していない。それがあってか、今日では木宮泰彦の名は本学創立者としてのみ語られ、日中文化交流史の大家としての側面はほとんど忘れ去られている。それは学界においてのみならず、本学内部においても同様である。本学に奉職する人間の一人として、また同じ歴史学を学ぶ者として、木宮泰彦の歴史研究者としての側面が顧みられない現状はいささか寂しいものがある。戦前の木宮の決して短いとは言えない研究者としての道のりが、戦後突如学校経営を志し、辛酸を舐めながらもそれを成功裏に導いた情熱と行動力に、全く影響を及ぼしていないと考えるのはむしろ不自然なことである。本学に奉職し、学ぶ者は、創立者たる木宮泰彦の研究者としての側面も理解しておく必要があるであろう。

本稿はそうした問題意識に基づき、特に戦後唯一の研究書としての出版物である主著『日華文化交流史』を取り上げ、そこから看取できる木宮の研究者としての特長と問題点を別出し、考察するものである。本稿を通じてわずかでも歴史研究者・木宮泰彦について思いを致して頂ければ幸いである。

一、『日中文化交流史』と『日華文化交流史』の関係

実のところ、木宮の著作として内外で評価が高いのは『日中文化交流史』（以下、『日支』）である。木宮自身の回顧によれば、その理由は以下のようなになる。

この書は交通史とはいへ、単なる外交史や貿易史ではなく、寧ろ文化の交流に重点を置いたものであった。さうしてその頃は、この種の著述に乏しく、殊に日華文化の關係に就いて、終始一貫体系を整へた研究が全くなかったからであらう。いたく世の歡迎を受け、広く購読されたのみならず、昭和六年には中国の陳捷氏が本書を翻訳し、『中日交通史』と題して、上海商務印書館から出版し、次いで同十年には、同書館の普及版叢書である『萬有文庫』中にも入れられ、更に翌十一年には、王輯五氏が本書を簡約して、『中国日本交通史』を公刊するなど、中国学徒にも益々広く愛読され、日華両国民の融和親善にも多少の貢獻をなしたことは、著者の私に喜びに堪へないところであつた。（『日華文化交流史』序文）

日本国内における好評以上に、中国で早々に翻訳本が出たのみならず、普及版・節約版まで次々と刊行され、幅広く読まれたことが木宮を大いに喜ばせたことがうかがえる。しかし、木宮は同書の内容に満足していたわけではなかった。

併しこの書はもとと取扱った事柄が多方面に亘つてゐたから、刻苦数年大いに力めたとはいへ、なほ史料の蒐集検討の到らなかつた点もあり、従つて多少の遺漏若しくは紕謬のあることは免れ難いところであつた。故にこの書が益々愛読さ

れるに従って、著者としての責任の重大なことを痛感し、慚悚の情禁じ難いものがあった。(同右)

つまり、史料の蒐集・検討が必ずしも十分でないまま刊行したものであり、望外の好評を得られたことで、かえってその遺漏の部分への忸怩たる思いが増した、ということであろう。研究者としての木宮の真摯な姿勢がうかがえる。後述するような木宮の理想とする歴史研究の在り方からすれば、確かにそうした遺漏は決して許されないものであった。

そこで木宮は同書の増補版の制作に着手する。

適々文部省から精神科学奨励金を受けたのを機会に、数年に亘り宮内庁図書寮・東京大学史料編纂所・岩崎文庫・京都大学図書館・久原文庫・足利学校・神宮文庫・京都五山の寺々の書庫等を訪ねて、断簡零墨を探り、これが更訂を試みたが、一方公私の業務は日と共に繁多を加へるのみで、容易に進捗せず、筆を投じて嗟嘆したことも数々であった。(同右)

旧制高等学校の教員として多忙な日々を送る中で史料集めと更訂はなかなか進まず、「大人の風格」で知られた木宮も内心焦燥を感じ、成就をしばしばあきらめたほどであった。

しかし、文部省の命令により中国に長期出張した一九四〇(昭和十五)年の経験が、消えかかっていた木宮の情熱に火をつけた。特に宋・元・明時代(十世紀―一七世紀)に日本から渡った数百人の禅僧が学んだ江南の禅院の数々を訪れた体験が大きかった。

これ等の僧徒にして今日まで史籍に名を留めるものは、四五百人の多数に上るであらうが、いづれも交通不便な時代に、万里の鯨波を冒して彼地に渡り、仏教はもとより儒学・詩文

学・医学・書道・茶道・絵画・建築・造庭・印刷など、さまざまな文化を究めて帰り、或は彼地の文化的所産を齎して、次ぎ次ぎに清新な刺戟を与へ、我が文化の促進と発展とに貢献した。故にそれ等の事蹟を徹底的に調査研究することは、日華両国の文化の淵源・本質・発展を探る上に、極めて緊要であるばかりでなく、両国の親善友好関係を促進する上にも等閑に附すべからざる事柄である。よって中国に出張したのを機会に、これ等に関する資料を蒐集し、再び勇を鼓して旧著の更訂に専心し、昭和十八年に至り漸く稿を了へた。これを旧著に比べると、特に文化交流の研究に於て、前人未攀の新境地を開拓したところもあり、紙幅に於ても約三分の一を増加し、内容体裁ともに全く更新されたかの感があったので、改めて『日華文化交流史』と題し、梓に上すこととした。(同右)

しかし、ようやく出版寸前までこぎつけた増補版の原稿は一九四五(昭和二〇)年三月十日の東京大空襲によって印刷所もろとも焼失した。木宮の失望・落胆は深かった。ところが、木宮の執念はそれを上回った。以後十年を費やし、一九五五(昭和三十)年に待望の増補改訂版を刊行した。それが現在の『日華文化交流史』(以下、『日華』)である。そしてこの一書が、木宮が戦後に公刊した唯一の学術書となるのである。

それでは、次節から『日華』の内容を順を追って概観し、特長や問題点を指摘しながら、木宮泰彦が追求めた理想の歴史研究がどのようなものであったかを考えていきたい。

二、「一、漢・六朝篇」について

まず注目したいのが、『日華』もその前身となる『日支』も、編目を日本史の時代区分（奈良時代、平安時代、……）でも西暦（○○世紀—□□世紀）でもなく、中国の歴代王朝による時代区分で表記している点である。中国の圧倒的な文化的影响を素直に認める木宮からすれば当然のことであつたろうが、すでにこの編目の立て方からして戦前の日本至上主義的価値観との距離を看取するのは穿ち過ぎであらうか。

さて、第一篇「漢・六朝篇」は「第一章 原始時代に於ける中国文化の波及」「第二章 倭国と漢魏との通交」「第三章 日本と中国南朝との交渉」「第四章 上古の帰化漢人と文化の交流」の全四章からなる。その中で木宮は、日本海回路（対馬海流）に乗って大陸から山陰・北陸へと至る航路と、朝鮮半島南部から北九州に至る「海北道中」（『日本書紀』神代巻に「ウミノキタノミチノナカ」と示される）の航路を使って、上古から大陸の文物が頻繁に日本にもたらされ、その影響を強く受けながら日本に古代国家が形成されていく状況を概述する。

しかし、本篇のページ数はわずか五四ページであり、総ページ数七二〇ページ（巻末付録の年表を除く）のわずか七・五パーセントを占めるに過ぎない。しかし、それはやむを得ないであろう。原始時代から六朝時代（三—六世紀）までの歴史資料は極めて限られる。中国には「正史」をはじめ多種の史料があるとはいえ、多くは唐代（七—十世紀）以降に編纂されたものであり、日本に関する情報を記した同時代史料は極めて乏しい。まして日本側の

史料となれば、戦前は『記紀』を中心とするわずかな文献史料と、これまたわずかな考古資料がある程度であつた。しかも、木宮の主たる関心が禪宗を学びに多くの日本僧が中国に渡った宋・元（十世紀後半—十三世紀後半）以降の時代に向いていた以上、六朝以前の時代を扱ったこの篇がどうしても概説的・一般論的記述になるのは致し方なかったであろう。

したがって、本篇は戦前に得られた範囲の基礎的情報に基づいて淡々と大陸と日本の交流状況を概述している印象が強いのもやむを得ないことである。戦前から激論があつたはずの「邪馬台国論争」についても、

吾人は星野恒博士の説に従ひ、邪馬台を以て、筑後国山門郡となし、卑弥呼を以てこの地方にあつた一女酋と解すべきものと信ずる。（中略）矢張り従来から行はれた星野博士の説が最も妥当であらう。（『日華』一九—二〇頁）

となんら判断の根拠も示さずに星野恒の一論文に依拠して「九州説」に与している。戦後やかましくなった「任那日本府」の位置づけについても何も言及がない。論争がかまびすしい問題は巧みに避けて、極力穏当な説に従って筆を進めている印象が強い。

なお、木宮は『日華』を通じて皇族（及びその祖先とされる神々）の行状を全て敬語で表わしている。底本となった『日支』が明治末・大正初めの著書である以上当然とも言えるが、一方で敗戦後十年を経過して出版された『日華』においてもこの叙述法を改めなかった真意は何か、いささか疑問の残るところである。この点についてはすでに別稿で論じたので深入りは避けるが、皇族への敬称を徹底する一方で木宮が『記紀』を「神話伝説」と断じ、

北海道中と称する日韓交通路のあったことは推測されるが、単に神話伝説のみに拠つたのでは、直に首肯し難いであらう。けれどもここに記紀とは全く離れて、専ら遺跡遺物のみによつて研究した考古学の結論がこれと合致するならば、その事実なることを承認せざるを得ないであらう。(八頁)

とするように考古学の成果を重視していた点は、木宮が決して皇国史観に心酔した国粹主義者ではなく、あくまで実証を重んじた歴史研究者であつたことをしのばせる根拠として注目しておきたい。

なお、日露戦争後の浮流水雷の動きをもとに日本海の流れを論じた部分(四頁)と、「弓月君が百二十県の民を率いて」日本に來たとする史料の表記を「狛二十七県百姓」ではなかったかとする論証(四八頁)は具体的でおもしろい。木宮は京都帝大大学院生時代に内田銀蔵から、他者の見解と自説を混同されないように出典を明記するように指導されたことを記しており、それに照らせば典拠を示さない右の論証は木宮のオリジナルの意見と思われる。そうであるなら、このユニークな意見はもっと強調してもよいと思われるが、あくまで控えめに提示するところに木宮の慎重かつ謙虚な姿勢がうかがえる。

三、「二、隋・唐篇」について

本篇は「第一章 遣隋使」「第二章 遣唐使」「第三章 遣唐使 廢絶後の日唐交通」「第四章 遣唐学生・学問僧と文化の移植」「第五章 帰化唐人・インド人・西域人と文化の移植」からなる。い

よいよ日中交流が本格化した時代であり、関連史料も一気に豊富になるため、木宮の記述量も増え、本書全体の二五パーセント弱に及ぶ一七七ページにわたっている。

第一篇との大きな違いはページ数以外にもある。「遣隋留學生・学問僧一覧表」(七〇―七一頁)、「遣唐使一覧表」(七四―八一頁)を初めとして、大陸に渡つた使者・学生・学僧の情報を網羅した表が八つも挿入されている。実のところ、木宮の研究者としての面目はこうした詳細な表にこそ現れていると言える。表の充実が『日支』以来の木宮の著作に共通する特徴である。膨大な資料から基本的な事実、つまり英語でいう「5W1H」(いつ・どこで・誰が・何を・どのように・どうしたか)を要領よく抽出し、時系列に沿って見やすい形で表に簡潔にあらわすことは、歴史研究の最も基礎的な作業である。今日、歴史学の研究論文でこのような表を掲載することはごく一般的なことであるが、戦前においては案外例が少ない。それは、極めて地味で根気のいる作業であるとともに、一方で研究者の史料解読能力の水準を露呈しかねず、ともすれば自己の歴史観を雄弁に語ることが研究者の本分とみなされがちであつた戦前の歴史学界にあっては、ややもすれば軽視され忌避される傾向があつた。木宮は、あるいは意図的にそうした風潮に逆らい、あえて「表づくり」という地道な作業に打ち込み、それを公開することで、自身の標榜する実証主義的歴史研究の正当性を訴えようとしたのかもしれない。

だからこそ、その表に多くの遺漏があることが判明した以上、いかに『日支』の評価が高くとも、木宮はその改訂版を出さずにはいられなかったのである。『日華』の本文はほとんど全編『日支』

の丸写しであり、戦後十年を経ているにも関わらず皇族への敬称もそのまま継承されているように、本文の改稿に木宮がほとんど意を用いていないことは歴然としている。もちろん出版目前の原稿が東京大空襲で焼失し、戦後は学校経営に忙殺され、『日支』の本文を一新する余裕は到底なく、『日華』の本文はその焼き直しで間に合わせるしかなかった、という事情があったことは想像に難くないが。

したがって、木宮自身の本文からその歴史観や価値認識を読み取ることはかなり困難なのである。第一篇同様、あい変わらず史料に基づきながら淡々とした筆致で事実を確認するような文章が続く。遣隋使・遣唐使が盛んに派遣され、日中交流史上の一つのピークをなす時代であるにも関わらず、木宮の筆致はあくまで冷静かつ平板であり、読者を特段喜ばせるような配慮はほとんど皆無である。

しかし、わずかに木宮の感情の高ぶりを感じさせる箇所が二つある。一つ目は聖徳太子の対隋外交について述べた、

聖徳太子が一面中国文化に憧憬し給ひ、これを撰取しようとする念があらせられたに拘らず、他面にはどこまでも国家的体面を重んぜられ、隋に対して対等の態度を執らせたことはまことに、景仰すべきことといはねばならぬ。(六六頁)

というところである。中国文明に対する憧憬と敬意をほとんど隠さない木宮であるが、隋に対等な立場を主張した聖徳太子の外交に快哉を叫ぶ姿からは、戦前の皇国史観に一定の距離をとっていた木宮にしても隠しようがなかった愛国心の発露が垣間見られる。

もう一つは、円仁『入唐求法巡礼行記』から病氣となった一人の水夫をやむなく浜辺に置き去りにしなければならなくなった場面を引用し、

今将に息絶えなるとする病苦の身を、ただ独り淋しく異境の浜辺に棄て去られたあはれな一水手に対し、一掬同情の涙なきを得ない。美しく華やかであつた唐文化を移植せんが為には、かうした幾多のあはれな犠牲者があつたことであらう。

(九九頁)

と記した箇所である。このように木宮の感情が発露した記述は非常に少なく、その意味で大変感興をそそられる。

次に、本篇からうかがえる木宮の独創的な見解を拾ってみたい。南路を取った第三期・第四期の遣唐使船のほとんどが遭難している原因について、東シナ海の季節風への無理解が原因と分析した部分(一〇六頁)は、のちに藤家禮之助『日中交流二千年』にも引用されており、卓見といえる解釈であるらしい。

また、奈良東大寺の大仏のモデルを唐・白司馬坂の大仏(銅仏)と推定した点も独創的な解釈であった。ただし、

彼(濱川注：唐・白司馬坂の大仏)にあつては、ただ仏教尊信の余り、無用の大工事を企てたものに過ぎないが、我にあつては盧舍那仏の功德により、国家の安寧、万民の幸福を祈らうとせられた聖武天皇の御聖旨に出たものである。

(二八八頁)

とするなど、聖武天皇の発願と東大寺大仏の存在を過剰に評価する点は、木宮にしてはやや筆が走りすぎの感もある。戦後自らが創建した学校名に聖武天皇の御製の一句を借りて「常葉」と名付

けたことからわかるとおり、木宮の聖武天皇への思い入れはすでに『日支』を著したころからあったものと思われる。戦後、徒手空拳で学校経営に乗り出した背景には、「国家の安寧、万民の幸福」を祈って東大寺と大仏を建立した聖武天皇への長年の憧憬があった、と見るのは穿ち過ぎであろうか。

さらに、印刷術を日本の独創とする黒川真頼の説を否定し、唐から伝わったものと冷静に判断している（二二〇―二二四頁）点も、木宮のオリジナルな説と言える。

奈良朝に於ける殆ど総べての文化が、いづれも唐代文化の影響を受けて発達した事実から類推するに、印刷法も亦遣唐学生・学問僧などによつて、唐から伝へられたものであらうと推測を下すも敢て不当ではないであらう。

（二二三―二二四頁）

こうした記述を見ると、国粹主義が蔓延した戦前にあっても木宮が過度にそれに毒されることなく、往時の中国文化のレヴェルの高さを率直に認め、敬意を抱いていたことがわかる。あえて言えば、過度な中国礼賛にも日本礼賛にも陥らず、史料に則し徹底して歴史事実を追究した末に看取された中国文化の恩恵を率直に記述しているのである。こうした公平中立な態度は我々も見習うべきであらう。

一方で、今日の学問的水準から見ても首肯したい見解ももちろん垣間見られる。例えば、「我が国に道教が伝わらなかつた」（一七九頁）と断言しているが、福永光司の諸研究¹⁰などに見られるように、戦後は道教の日本文化への影響がむしろ積極的に論じられている。道教の日本文化への影響を見出し得なかったのは、や

はり木宮の関心が中国文化の中でも特に仏教に注がれていた点が関係しているであろう。

また、第五章で帰化唐人の代表として鑑真を大きく取り上げ、仏寺建造・仏像作成・教義（戒律、天台、密教）招来・医学・漢文学などさまざまな方面に多大な影響を残したことを説く一方で、

最澄・空海によつて大いに顕揚された台密¹¹教は、平安朝に至つて突如として起つたものではない。厳正な意味に於て、平安朝の新仏教といふのは当らない。既に奈良朝に於ける帰化唐僧によつて、次第々に養はれて来た潜流が、最澄・空海の二僧の力によつて、表流として歴史の表面に浮び出たといふ¹²過ぎぬ。（二二〇頁）

と断じ、日本でははなはだ有名な最澄・空海の事蹟についての記述はいたって淡泊である。こうした点にも木宮流の公平中立さがかがえる。

なお、唐文化が元来西域・インドなど周辺の多様な文化を包摂したものであったことから、それを移入した日本にも西域・インド文化の影響が少なからず及んだ状況を詳しく説いている。その中で木宮は、鑑真の弟子の如寶について、「胡国人安如寶」（『唐大和上東征伝』）と史料にあることから Bokhara（安国）出身であろうとしている。そうだとすれば、これは間違いなくソグド人のはずである（木宮は「ソグド人」とは述べていないが）。安・史など固有の姓を名乗り、従来は唐代における商業面での活躍のみ語られてきたソグド人たちが、墓誌など新史料を用いたここ数十年のソグド人研究の深化によつて、軍事・外交・宗教面でも活

躍していた事実が解明されている。今後は「日本にソグド人はどれだけ来ていたか？」という問題も一つのテーマになりうるであろう。如寶がその一例であることは研究者間では周知の事実らしいが、今日のソグド人研究の隆盛を泉下の木宮が知ったならば、そこにいささかの貢献ができたことをきっと喜ぶに違いない。

四、「三、五代・北宋篇」について

第三篇は「第一章 五代に於ける日華交通」、「第二章 北宋との通交」の二章からなり、ページ数は七九、全体の約一一パーセントと比較的分量の少ない篇となっている。しかし、木宮の研究の特長と言える表は、「五代に於ける日華往來船舶一覧表」(二三九―二四二頁)、「五代に於ける入華僧一覧表」(二四九頁)、「北宋との交渉一覧表」(二五五―二六二頁)、「北宋時代に於ける入宋僧一覧表」(二七五―二七八頁)、「摺供養表」¹²(三〇五―三〇六頁)と五つもある。二倍以上のページ数があつた前篇の表が八つであつたことを考えると、本篇の方がむしろ充実しているとも言える。

菅原道真の建議による遣唐使の中止(八九四年)、その後まもなくの唐王朝の滅亡(九〇七年)を受けた五代の時代(九〇七―九六〇年)は、貿易船の来航は意外に多かったものの文化的な交流が著しく停滞した時代であつた。その後成立した北宋時代(九六〇―一二二七年)は日本の平安時代・藤原氏全盛時代に当たり、戦後に言う「国風文化」の隆盛期であつた。この

時代の特徴を木宮は、

北宋時代にあつては、彼は唐末五代の擾乱によつて一旦衰へた文化を復興しようとしてゐた時であり、我は藤原時代に於ける日本文化の大いに栄えた時であつた。従つて我は彼の文化を摂取したが、また我が文化を彼に致して、その闕を補ふなど、彼我の文化的地位はほぼ対等であつた。

(二五四頁)

と断言する。特に一〇世紀末に北宋に渡り、北宋第二代皇帝・太宗に謁見した尙然^{ちやうねん}について詳細に取り上げ、彼の言動を絶賛している。

尙然と太宗のやりとりは『宋史』日本伝に詳しく見える。それについて木宮は、

彼は太宗の下問に答へて、

国王以王為姓、伝襲至今王六十四世、文武僚吏皆世官、といつてゐる。外国の帝室・王室にはそれぞれ姓なり王朝の名なりがあるのに、我が皇室には全くかやうなものはない。蓋し諸外国は革命篡奪の忌はしい事変がしばしば繰返され、彼此前後の王朝の区別する必要があるが、我が国に於ては肇国以来万世一系の天皇を戴き、かやうな必要を認めないからである。さうして我が国では上古氏族制度の行はれた時代はいふまでもなく、大化改新以後も藤原氏以下文武百官は概ね世官世職であつた。

(二九〇頁)

と尙然が「万世一系」の天皇制と文武の官位の世襲制を日本の特長としてアピールしたとし、

太宗はこのことを聞いて大いに感嘆して宰相に謂つて曰

く、「日本はただ島夷に過ぎないのに、世祚遐久にして、その臣も亦継襲絶えないのは、これ蓋し古の道である。然るに我が国は中華中国と称して文化を誇りながら、唐末の戦乱以来、国内が分裂して、五代に於ける攻防盛衰は最も甚だしく、大臣世胄家も亦よく嗣続したものは鮮い。（中略）」と。太宗に与へた感銘が如何に切実深刻であつたかが想像されるではないか。（二九二頁）

と太宗が羨望の声を挙げたことを得々と記す。さらに、

太宗は（中略）特に民政に意を注がしめるなど、仁政を施したことは有名である。奮然の物語つたところが、太宗の政治上に如何なる影響を与えたか、今ここの的確な証拠を挙げることは出来ないが、以上の事実から推測して相当の影響を与へたものと考へざるを得ない。（二九三頁）

と述べている。辺境の島国から来た一渡来僧の言がそれほどまでの影響を及ぼしたとはにわかに信じ難いが、奮然に対する木宮の絶賛ぶりを見ると、中国文化への憧憬を隠さない一方、その中国に対等以上の意思表示をした日本人の登場に快哉する様子もうかがえる。それは先述の聖徳太子への絶賛にも通じるものがある。こうしたところには、木宮の公平中立な態度を感じてもなおにじみ出る戦前の皇国史観・国粹主義の浸潤力を感じざるを得ない。また、こうした記述を戦後の編纂である『日華』でも改めなかった点に、木宮の戦前・戦中・戦後を経ても変わらない皇室への崇敬の念を見てとることができる。

その他に、北宋の神宗が僧成尋を厚遇し、その縁から日本に御筆文書や法華経經典・錦などを送ったこと（二七一頁）、『往

生要集』を著した源信が自著を宋に普及させるべく尽力したと（三一三頁）などの事実をもって、日本文化の水準の上昇とみなしている。それは一方で、宋代以降の中国において印刷物が大量に出版され、日本に関する情報量も一気に増えたこと、さらにそれらの書物の多くが今日まで残存している点が関係しているものと思われる。

五、「四、南宋・元篇」について

第四篇は「第一章 南宋との貿易」、「第二章 入宋僧・帰化宋僧と文化の移植」、「第三章 元との貿易」、「第四章 帰化元僧と文化の移植」、「第五章 入元僧と文化の移植」からなる。一九九ページに及び、全体の二八パーセント近くを占める、本書中最長の篇である。

第一章冒頭に、

我が国と南宋との国交は全くなかつたけれども、私に商船の来往することは、すこぶる頻繁であつた。（三二二頁）

と記すが、実際は商船の来往に便乗する形で平清盛や鎌倉幕府がさかんに南宋と交わり、仏僧の往来も盛んだった。木宮は皇室による往来でなければ「国交」とは認めなかつたようであるが、一方で南宋から送られた牒書に「賜」字があるなどの些末な理由で日宋貿易を非難する公家・貴族の狭量さを描写しつつ、かく我が商船の宋に赴くものの多くなつたのは、当時我が国人が武門の興隆につれて頗る進取的となり（後略）

（三二三頁）

と武士を評価している点は興味深い。

特に第二章は、木宮の禪宗と鎌倉武士への思い入れが前面に出ている。木宮は、鎌倉時代に禪宗が急発展する事情を以下のように説明する。

鎌倉に於ける禪の興隆に最も力を致したのは、いふまでもなく執権北條時頼であるが、彼は最初から誠実なる禪の帰依者ではなかつた。寧ろ政策上これが興隆に尽くしたものだと思はれる。承久の乱後北條氏は確実に天下の政權を掌握したが、教權に至つては未だ何等獲るところがなかつた。諸大寺は概ね京畿地方に集まり、その門跡は皇族・公家の出身を以て満たされてゐた。このことは鎌倉幕府にとつて甚だ心淋しく感じたに相違ない。時頼の胸中には、鎌倉に一大伽藍を建立し、政治の中心である共（マ）に、また宗教上の一中心としたいと熱望したことであらう。けれども在來の天台・真言や、これから派出した浄土・日蓮の如き宗派を以てしては、旧勢力の羈絆を脱することはむづかしい。寧ろ日本仏教とは全く關係のない、純中国式な、さうして今や大いに興隆の機運に向ひつつあつた禪を採用するに如かずと考へたものではあるまいか。

(三九〇頁)

さらに木宮は以下のように情熱的に述べる。

当時在來の仏教徒が私利私欲を逞しうし、腐敗墮落の極に達してゐたのに反し、禪僧が専ら寡欲質素を旨とし、三衣一鉢の外は、居所を思はず、衣食を食らず、百丈禪師の所謂「一日不作一日不食」といふ主義に則り、専心道の為に励んだことは、勤儉素朴を尚んだ時頼を始め鎌倉武士を感激せしめた

のであらうし、また叢林の規矩の厳正であつたことや、彼等の機鋒の鋭い態度などは、礼節を重んじ、意気を尚んだ鎌倉武士のいたく悦ぶところであつたであらう。斯の如くにして、時頼は次第に熱心な禪法の帰依者になつたに違ひない。

(三九一頁)

具体的な史料も示さずに他宗徒の「腐敗墮落」を糾弾し、禪宗の長所とそれいかに鎌倉武士が魅了されたかを熱く述べたこの部分は、全体に淡々と平板な記述が続く本書において一種異様な光彩を放つ。さらに木宮は、禪の本質を以下のように語る。

修禪者の説くところに従へば、禪は相対的な吾人の常智と異り、絶対的知識で、有に非ず、無に非ず、而も有無共に存し、有無共に空しきもので、(中略) 由來禪にあつては、教外別伝不立文字といひ、言葉^はを以てよく説く能はずとなすものは、全く絶対的であるが為である。例へば「時間とは何ぞや」「空間とは何ぞや」と問はば、これに対して何人も完全なる説明を為すことは出来ないであらう。是れ吾人が時間や空間を認識するのは全く絶対的^はであるからである。吾人の常智は相対的であるが故に確然不動の真理なく、(中略) 事に臨んで周章狼狽するに至るのである。然るに禪は絶対的であるから、万古不易の真理で、所謂「立処皆真、随處為主」ことを得るのである。

(三九五頁)

自身が禪寺の出身であり、幼いころは他寺に出され厳しい修行も経験した木宮にとって、禪の教えの絶対性・正当性は疑いを挟む余地もない自明のことであつたのか。他宗派の教義内容に踏み込む記述がほぼ皆無である『日華』にあって、禪の素晴らしさを

絶賛するこの箇所は、非常に感情のこもった記述ではあるが、一方ではなほ公平さを欠き、歴史学の研究書として見た場合、最も厳しく批判されるべき箇所であるかもしれない。

事実、これ以降本書は専ら禅僧の日中交流の記述に傾き、他宗派のそれへの言及はほぼ皆無となる。確かに宋代以降、中国においても従来あった仏教諸宗派のほとんどが廃れ、上流階級がたしなむ禅宗と、庶民が心のよりどころとした浄土宗の二派だけが生き残る状態となった。木宮は、

中国に於ける禅宗は五代・北宋を経て益々盛大に赴き、南宋にはすでに爛熟期に達し、中国の仏教といへば、殆ど禅宗に限られるようになった。
(三五三頁)

と断じ、入宋禅僧による宋版大藏経・儒教典籍・仏像・建築技術・医術・印刷技術・喫茶の習慣などさまざまな文化要素の招来について述べる。

しかし、禅宗の素晴らしさ、鎌倉武士による禅宗への帰依の深さと真摯な字びを力説されればされるほど、中国文化に盲目的に迎合する前近代社会の日本人の姿が浮き彫りにされるだけのようにも思われる。

ともかく、禅僧の往来を中心とする日中の文化交流はその後も拡大の一途を遂げた。第三章の冒頭で木宮が元代の中国と日本の関係について、

日元両国は互に戦備を整へ、頗る險惡な情勢にあつた（中略）何人と雖もこの間に平和的な通交が行はれやうとは、容易に想像も及ばないであらう。（中略）日元間の通交が意外に頻繁であつたことに一驚を喫せざるを得ない。（中略）元末凡

そ六七十年間は、各時代を通じて我商船の最も盛んに彼地に赴いた時代と想はれる。
(四一〇—四一六頁)

と記し、入元僧も「幾百人あつたか計り知れないほどである」（四一六頁）とその多数を強調する。

しかし、元寇後に多数の元の商船が往来した理由として、文永・弘安の両役（一二七四年・一二八九年）により、海洋を隔てた日本を征服することの困難なことを覚り、平和的手段によつて、帰服せしめようとしたからであらう。
(四一六頁)

とする分析は根拠に乏しい。なぜなら、元の世祖フビライが三度目の日本遠征を計画していたことは周知の事実だからである。なぜ二度の元寇を経ながらこの時期の日中間の貿易が突出して盛んだったのか、という根本的な疑問に木宮は答えていない。

実はこの点に関し、不可解な事実がある。木宮は『日支』下に「第三章 元寇」を設け、その中で日本征服に二度失敗したフビライが「憤激の余り、大規模の軍備を整へようとしたが、その結果徒に民を疲らし、騷擾を醸し中止の已むなきに至つた」が「そこで彼は日本の上下が深く禅宗に帰依してゐるといふことを聞いて一策を案じ、普陀山の僧愚溪如智等を遣はして、日本を諭さしめようと考え」（『日支』下、一二四頁）たが失敗、その後フビライが死去（一二九四年）した後も元は高麗軍の派遣という形でしつつく三度目の日本侵攻を企てていたが、ついに一三〇一年薩摩の甌島を襲撃したのを最後に日本侵攻計画は記録から消えるとしている（『日支』下、一三三頁）。右の『日華』四一六頁のあいまいな推測より、はるかに説得力のある記述である。

ところが、概ね『日支』の本文・構成を引き継いでいる『日華』において、なぜかこの「元寇」の章は完全に削除されている。なぜ木宮はそうしたのか。この章を残してあれば、あたかもフビライの第三次日本遠征計画について木宮が知らないかのように誤解される恐れも生じる『日華』四一六頁の記述も不要になったであろうに、全く不可思議としか言いようがない。

ちなみに今日では、日元間の活発な貿易も「モンゴル大帝國」のユーラシア支配による「商業の自由化」の成果の一端と理解されている。¹⁴ 木宮にそうした視点が見られないのは、戦前の歴史学の水準の限界のゆえか。

また、第四章に帰化元僧一覧表（四三二―四三三頁）、第五章に入元僧一覧表（四四五―四六五頁）があり、特に後者は実に二・二二人を数え挙げており、『日支』下同表の一五五人を大幅に上回っている。木宮が執念をもって評価の高かった『日支』の改訂版を出そうとした理由は、端的にこの部分にあったのかもしれない。それはともかく、興味深いのは帰化元僧・入元僧とも「総てが禅僧」（四八〇頁）と明言し、前代の入宋僧に比べて禅そのものを伝えるという熱意に欠け、「観光的漫遊的」（四六九頁）傾向が強いと批判する一方、彼らによって詩文学・儒学（宋学）・史学・書道・絵画・茶道・日常の衣食住など広範な文化が中国（元）からもたらされたことは「寧ろ幸福」（四六九頁）と評している点である。外交・政治的交流や経済的交流、また仏教教義をめぐる交流よりも、それらを包摂しつつ日常の人々の暮らしや芸術にまで影響を与えた広義の「文化交流」に強い関心を抱いた木宮ならではの叙述と言える。

その他、本篇に見える木宮の独創になる記述を挙げておく。第五章で多数の元の彫工が来日し日本の開版事業が盛行したことを述べた箇所について、木宮自身が『無量寿禅師日用清規』の彫工者を最も有名な彫工である兪良甫と明らかにした点（四八九頁）、同章で漢文学の「五山文学」を「全然和臭を脱して殆ど生粋の宋元の詩文学と異なるところがない」ことをもって前後の時代のそれと比べて「最も優秀なもの」とする点（四九九頁）、『喫茶往來』の製作年代について平泉澄の説を批判した点（五一二頁）などが挙げられる。また「自画自賛」の由来（五〇六頁）、ケンチン汁の由来（五一五頁、及び五一九頁注（5））などの情報も木宮ならではの該博な知識が垣間見られておもしろい。

六、「五、明・清篇」について

最後の第五篇は「第一章 足利幕府と明との通交貿易（其一）」、「第二章 足利幕府と明との通行貿易（其二）」、「第三章 入明僧・来朝明人と文化の移植」、「第四章 明末に於ける日華の通交」、「第五章 清との貿易」、「第六章 来朝並びに帰化明清人と文化の移植」の全六章からなる。この篇も一九八ページあり、前篇と並び全体の二八パーセントを占めている。端的に現代に近づく分、残っている史料も多く、それらを細大漏らさず取り上げるのが木宮の研究姿勢である以上、記述分量が増えたのは当然であろう。

本篇で特に目立つのは、足利政権（室町幕府）の対明貿易の姿勢に対する批判と、逆に反明的姿勢に終始した懷良親王（後醍醐天皇の皇子。九州に征西府を置き室町幕府と対立）を絶賛する姿

勢である。足利義満が「爾日本国王源道義」と記し日本を属国視した明・恵帝からの国書を甘んじて受けたことを、

我が外交史上未だ曾て見ざる汚点を印したものととして、後世から大いに批難されたところである。
(五三二頁)

と断じ、また義満が明・成祖永楽帝に自ら「日本国王臣源表」と題した国書を送ったことについても、

我が国体を辱しめたことは言語道断といはねばならない。
(五三二頁)

と手厳しい。一方で明の太祖洪武帝に一戦を交える覚悟を示した返書を送った懷良親王については、

その雄偉なる意気、その壮快なる文辞一異彩を放つものといふべきである。
(五二七頁)

と激賞している。このあたり、木宮の筆法は後醍醐天皇の建武の親政を挫折に追い込むことで成立した足利政権に終始批判的である。それは戦前の皇国史観に照らせばごく普通の態度ではあるが、戦後十年経ってもその態度を改めなかった理由は何か、どうにも判然としない。

そうは言っても足利義満の低姿勢によって明とのいわゆる勘合貿易が始まり、日中の交流がまた盛んになったことは否定できない。その交流の事実についての木宮の記述は変わらず精細である。日本側は専ら貿易の利益を求め、明側は貿易と引き換えに日本が倭寇を取り締まることを常に期待していたと分析している。

また、入明僧の役割について、明初には入元僧とほぼ同じく求法・詩文の学習を目的としたのに対し、勘合貿易主体となって以降は征西府・足利幕府の使僧（外交使節の一員）のみになったと

し、明の厳格な海禁政策の影響を見ている。一方で九州諸侯が明との通交貿易を求め、倭寇と結託したことなど、地方政権が関わった日中交流についても目配りを欠かしていない。

しかし徳川政権（江戸幕府）時代になると日本が鎖国政策を採ったため、前代までと異なり日本から中国に渡った人士についての記述が一切なくなる。その欠を埋めるためか、唯一の貿易港となった長崎における貿易機構や人的組織の説明（第五章第一節）や、清の貿易商人をどのように長崎に滞在させたかの説明（同第五節）など、これまでほとんど見られなかった記述が目立つ。また、鎖国下とはいえ清との貿易は活発で、ために日本からの金銀銅の流出が著しく、新井白石の建言でやむなく年間の来航船数を制限したり、「信牌」を発行してそれを持たない船の入港を禁じたりした記述が興味深い（第五章第三節）。一方この時代には以前と違い種々の貿易税を課すようになったこと（同第七節）、日本からの輸出品として伝統的目玉商品だった刀剣・硫黄が禁輸品とされた（同第八節）ことなど新たな変化も記しているが、その理由についての考察はない。

本書の最後を彩る記述は、清代に日本に伝わった黄檗宗の文化的影响にまつわる記述である。中国式の読経・建築様式・文化様式を日本でも堅持した黄檗宗の影響は、建築・書画・印刻・医療・音楽・料理など多岐に渡った。木宮は相変わらずそれぞれについて詳細に述べているが、なぜ江戸幕府が黄檗宗をそれほど鷹揚に受容したのか、など当然湧いてくる疑問には答えてくれない。

なお、『日華』本文は本篇で終わるが、総括や「あとがき」のような文章は一切ない。浩瀚な大冊でありながら、あまりに唐突

な終わり方と言わざるを得ない（『日支』も同様だが）。

また、幕末明治期以降の日中関係に関する記述は一字もない。木宮には戦中・戦後の社会的激動や自己の体験をわずかなりとも『日華』に反映させるつもりは毛頭なかったと言わざるを得ない。なお、巻末には付録「日華通交年表」があるが、戦後十年を経て刊行された本書においても『日支』と同じく「皇紀」を使っている点には驚かされる。

七、本書の総体的評価について

『日華』の底本となる『日支』が国内外で高く評価され、特に中国で早々に翻訳され、以後も簡約版・通俗版が連綿と出版されたことはすでに本稿第一節で確認したが、一方で『日支』には批判的な声もあった。

木宮の長男である木宮之彦は『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』（静岡谷島屋、一九八五年）を著わし、「歴史家木宮泰彦の日中文化交流史の本格的な研究を回顧して、いかにわが史学界に多大の業績と足跡を残したかを再認識」することを目指した。之彦はこれの中で木宮の著書を刊行年順に取り上げ、それらについての書評や寸評、引用や言及を網羅的に取り上げている。そのうち『日支』について、秋山謙蔵『日支交渉史研究』（岩波書店、一九三九年）に見える木宮の『日支』への言及を引用する。

（秋山曰く）明治維新以後における日支交渉史研究には四つの型がある。A 維新型・B 明治型・C 大正型・D 昭和型であり、（中略）大正型の代表として木宮泰彦『日支交通史』を

あげ、さらに三浦周行の論文「元寇に関する新研究」八代国治の論文「蒙古襲来についての研究」などを付加挙示し（中略）木宮泰彦の研究は従来の諸研究を綜合し大成したもので、維新型の研究を詳細にしたものであるが、（中略）南進の気概、国力の進展をになうような熱意が消えている。三浦・八代らの研究も「研究は静かに進められ」「新史料の発見をもってこの研究の基礎とせられ、ただこれを学界に報告せられたに止まる」と述べている。（中略）昭和型は（中略）「さらに強靱なる国民的熱意」あるものといっている。そして秋山謙蔵は自らの著書『日支交渉史研究』こそまさに昭和型の代表的なものであると擬している。（『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』九七―九八頁。傍線濱川、以下同じ）

このような秋山の評価について、之彦は「（筆者付記）」として、実証性は学問の本質であるが、それはなにもそのまま「国民的熱意」を喪失していることを意味していない。川添昭二氏はその著『蒙古襲来研究史論』のなかで述べられている。筆者は川添昭二氏の考察に全面的に賛意を表するものである。

（同右九九頁）

と疑問を呈している。

秋山は「日本の歴史を一貫するものの力とは何か。金匱無欠なる国体の尊厳であり、この尊厳無比なる国体を捧持して発展した国家及び国民の生活である。」（『歴史と現実』創元社、一九三九年、七頁）と明言し、特に日本の海外進出について、

この活躍の一つの結論は、かの豊臣秀吉が、天皇を北支の中心である北京に、自らは南支の中心である寧波に移り住み、

以て東亜百年の計を樹立しようとした征明役であった。

(同九頁)

と日中戦争のさ中であつてあたかもその最終目標と重ねるがごとくに秀吉による明征服という夢想を到達点としたほどの人物である。そのような体制迎合主義者の目から見れば、史料の博搜と実証に徹した木宮のような「大正型」の文献史学など面白くもなんともない無味乾燥な代物に見えたのであろう。それにしても「南進の気概、国力の進展をになうような熱意が消えている」とはいかにも筋違いな見解と言わざるを得ず、之彦でなくとも反発を禁じ得ない。

しかし、木宮の研究に対する「平板・概説的」という評価は少なくない。森克己『新訂 日宋貿易の研究』(勉強出版、二〇〇八年)所収の山内晋次「解説 森克己の研究の意義と問題点」(同書四五三―四六五頁)に、

日宋交通・日宋貿易に関する研究はもちろん、森克己以前にもさまざまにおこなわれている。たとえば、はやくは、森の恩師である黒板勝美(一九一一)・辻善之助(一九一七)、あるいは東京帝国大学の先輩にあたる木宮泰彦(一九二六・一九二七)・西岡虎之助(一九八四)らの研究がある。

(同書四五六頁)

とあり、その注に、

先行研究としておそろくもつとも詳細かつ体系的であつたと思われる木宮泰彦の業績については、なぜか森はまったくといっていいほど言及していない。管見の限り、わずかに森克己(一九五九)において、「概説的平板的な研究」と低い評

価を与えているのみである。

(同書四六三―四六四頁)

と見える。ここで言う「森克己(一九五九)」とは、国際歴史学会議日本国内委員会編『日本における歴史学の発達と現状』(東京大学出版会、一九五九年)「第八章 外国関係史」一 古代―室町時代」に見える森のコメントである。父・木宮泰彦の研究に対する評価を網羅的に集めた之彦も、森のこのコメントまでは探し出せなかったようであるが、その之彦本人も『日支』について「余りにも平板的であり、且つ概説的に叙述されている」(『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』二四頁)と率直に認め、その上で「しかし、平板的であり概説的であればこそ、本書は日中文化交流史に関するもつとも平易な通史であり、また入門書であると称してもよいであろう。」(同二四頁)とその積極的価値を強調している。また、之彦の弟であり木宮の次男の高彦も「父への回想―その人と思想―」で、

父の学問研鑽の方法は、膨大な資料に基いて、事実を丹念に分析総合して、その歴史的意義を探り、総合的な理論を展開するというやり方である。必ずしも直観力や想像力は豊かではなかったが、その透徹した分析力や厳しい批判力あるいは巧みな総合力は、遙かに人に秀でたものがあつた。¹⁶としてゐる。

端的に言えば、『日支』や『日華』は日中の文化交流に関わる膨大な史料に容易にアクセスできる「歴史資料集」としての価値が非常に高かったと言える。それは特に『日支』の中国における高い評価に見て取れる。中国で『日支』が高く評価されたのは、日本独自の史料は当然であるが、それに加えてかつては中国にも

存在したが戦乱や革命で散逸・消滅し、もはや中国では見ることができない貴重な史料が網羅的に取り上げられていたからではないか。そして、木宮自身もそのことをよく理解していたからこそ、『日支』刊行後に新たに知りえた少なくない史料の情報をみすみす死蔵するわけにはいかず、あらゆる困難を顧みずに『日華』の刊行をめざしたのであろう。

木宮は、自らの著作自体も日中文化交流の一翼を担う文化遺産として残そうと考えていたのではなからうか。空襲による焼失をもとめせず、『日華』刊行に執念を燃やした理由も、そうした大きな理想を持っていたと解することで初めて得心がいくように思われる。

おわりに

しかし、最後まで理解に苦しむのは木宮自身の中国観である。それはもちろん、木宮の皇国史観や国粹主義への態度と表裏をなす。戦前の姿勢はあえて問うまい。問題は、戦後になって木宮の考えに変化が生じたかどうかである。戦後十年目に刊行された『日華』において、皇族に敬語を使い、足利義満を痛罵し、年表に皇紀を使うその姿勢は、見ようによっては国粹主義を色濃く引きずっているように取られかねず、その中国観も押して知るべし、と誤解される恐れもある。

いったい、戦後の木宮は中国を、中国文化を、どう見ていたのか。今さらではあるが、『日支』と『日華』初版、及び『日華』再版の「序」を比較してその変化の跡を確認しておきたい。

『日支』の「序言」で木宮は、

過去に於ける支那は、実に我が文化の母国であつた。我が国は支那と交通することによつて、次ぎ次ぎに新しい文化を採り入れて、彼進めば我も亦進み、常に彼に追従して来た。

と述べる。「過去に於ける支那は」という書きぶりは、「しかし今は違う」という意味に取れる。中国を蔑視し、侵略の対象と見ていた二十世紀初頭の一般的風潮が反映しているようである。しかし、戦後十年目刊行の『日華』の「序」では、

過去凡そ千八九百年の永きに亘り、日華兩國間には絶えず文化の交流が行はれた。我が国は上代から朝鮮半島を経由し、或は直接に中国と交通して、次ぎ次ぎに新文化を摂取し、これを咀嚼し、醇化することによって我が固有の文化を培い、特異優秀な国風文化を創造して来た。さうして時にはこれを中国に致して、その文化の発展をも促した。

とする。ここでは、中国文化の圧倒的影響を受けつつもそれを消化して固有の文化へと昇華し、国風文化を作り上げ、時々それを中国に逆輸出した、という面を強調している。

ところが、それからさらに十年後の一九六五（昭和四〇）年に出た再版『日華』に見える「再版に際して」では、

我が史学界の傾向を観るに、一般に国史研究者の視野は、あまりに国内に限られ、大陸の政変や文化の動向には殆ど無関心のようなのである。これは国史研究の著しい欠陥であろう。いうまでもなく我が国は、アジア大陸とは海を隔て、東方に偏在する島国である。併し海は国と国とを隔離するが、また国と国とを結びつけるもので、遠距離の交通は、海によればこ

そ容易に行われる場合が多い。だから、原始時代に於てすら既に大陸の影響を被っていたことは、考古学の証明するところである。歴史時代に入ってから、大陸に於ける幾多の政変や文化の動向は、多少時代のずれはあっても、次ぎ次ぎに我が国に波及し、影響を及ぼしている。大陸との交通が殆ど杜絶した時代、我が国独特の、いわゆる国風文化が起ったといっても、仔細に検討すれば、これも既に前代に摂取し、受容したものを、咀嚼し、醇化したに過ぎないことが多い。だから国史の研究には視野を広くし、常に大陸の政変を考え、文化の動向を察しなくては、正しく理解することは困難であろう。としている。なんと、「国風文化」でさえ中国文化を「咀嚼し、醇化したものに過ぎない」、と言うのである。

この一文が、木宮の研究者としての最後の意思表示とみなせる以上、やはり木宮の研究における関心の根底には、中国文化に対する尽きせぬ感興と憧憬があったものと思われる。その感情は『日支』が中国で好評を博したことでさらに高まったのであろう。その好評にさらに応えるために、そして自らの著作を日中文化交流の礎の一つとするためにこそ、木宮は『日支』の改訂版たる『日華』を刊行したのである。

こうなると、現在の中国において、『日華』の認知度が必ずしも高くないことは、泉下の木宮を悲しませていることであろう。共産党政権の成立などの社会環境の激変が関係しているのかはにわかには判断がつかないが、『日支』に比べて『日華』の真価が中国で十分に知られていないことは確かである。多生の縁で木宮の衣鉢を継ぐべき位置に置かれた我々としては、今後の日中関係の

深化に貢献するために、『日華』の有効活用の方法を考えていくべきであろう。

【付記】

木宮泰彦『日華文化交流史』に関する二論文について

本稿『日華文化交流史』に見る歴史学者・木宮泰彦の姿」と、本誌所収の木宮敬信『日華文化交流史』に見る元・明・清と日本との交易について』の二論文は、若松大祐を代表として二〇一七年度から始まった学内共同研究『日華文化交流史』とその時代・木宮泰彦の研究成果を常葉大学の授業で活用する試み』の成果の一部である。

我々は、本学創立者の木宮泰彦が残した最後の研究書『日華文化交流史』を輪読し、その概要を本学関係者に紹介するとともに、木宮泰彦の歴史学者としての特長を顕彰する、という目標を立てた。しかし、凡百の大学にありがちな、創立者をひたすら褒めちぎるような提灯文になってしまっただけではない。木宮泰彦は本来歴史学者であり、自身が創立した学園に奉職する者たちからといえども、その論考をただ賛美するだけの美辞麗句は決して喜ばないであろう。我々は歴史学者としての木宮泰彦を敬愛するがゆえに、その著書からうかがえる研究上の欠点や疑問点は積極的に批判し、質することを心がけながら『日華文化交流史』を精読した。共同研究である以上、本来はメンバー三者で綿密に協議し、共著として一本の論文に仕上げるべきであったかもしれない。しかし、種々の業務に追いまぐられ、スケジュールのすり合わせもま

まならないまま時間は容赦なく過ぎていく。三者それぞれ専門も異なり、興味関心も視点も違う。やむなく共著とすることは断念し、それぞれが『日華文化交流史』から汲み取ったものを個人の責任でまとめ、公にすることになった。その後、若松は諸般の事情から本号への掲載を見送り、濱川と木宮敬信の二論文のみが本号に掲載されることになった。

濱川の論考は、概要の紹介よりも木宮泰彦の歴史学者としての特長と問題点の指摘に重点を置いた。なお、特に木宮泰彦と『皇国史観』との関わりについては別稿で論じた（濱川栄「木宮泰彦と皇国史観―主として『日華文化交流史』に拠る―」、『常葉初等教育研究』第4号、二〇一九年）ので、そちらもご覧頂きたい。木宮敬信は共同研究への参加が二〇一八年からであったため、輪読に参加した第四篇以降のみについての論考となっているが、概要の紹介を中心としつつ、木宮泰彦の親族ならではの情報を含んだものとなっている。近々場を改めて公にされる予定の若松の論考と併せ読まれることを願いたい。

注

- 1 木宮の親族・関係者によって編纂された『八十年の生涯―木宮泰彦 自伝と追憶』（同書刊行会、一九七〇年、非売品）の三六七―三六八頁に掲載された教え子の一人・秋鹿重彦の一文の題目。
- 2 以下、『日華』からの引用はいちいち書名を挙げず、頁数のみを記す。
- 3 星野恒「日本国号考」（『史学叢説』一、富山房、一九〇九年）
- 4 濱川栄「木宮泰彦と皇国史観―主として『日華文化交流史』に拠る―」（『常葉初等教育研究』四、二〇一九年）。
- 5 『木宮泰彦―その生涯と業績』（創立者生誕一〇〇年記念委員会、二〇〇六年）六六―六七頁。
- 6 日本の文武天皇―孝謙天皇期、唐の則天武后―玄宗期、七世紀末―八世紀半頃。
- 7 日本の光仁天皇―仁明天皇期、唐の安史の乱以後、八世紀後半。
- 8 藤家禮之助『日中交流二千年』（東海大学出版部、一九七七年）〔改訂版一九八八年〕、一〇九頁。
- 9 第四章第八節「唐の白司馬坂の大仏像と我が東大寺大仏」、一八二―一九〇頁。
- 10 福永光司『道教と日本文化』（人文書院、一九八二年）・『道教と日本思想』（徳間書店、一九八五年）・『道教思想史研究』（岩波書店、一九八七年）・『道教と古代日本』（人文書院、一九八七年）など。
- 11 この部分は『日支』上三三一頁では「いふに過ぎぬ」と正しい文章になっている。『日華』はおおむね『日支』の本文を写しているが、こうした誤字・脱字・誤記が少なからずある。単なる写し間違いであろうとは思いますが、校正が甘かったという批判は避けがたい。
- 12 この表には名称がついていない。いま便宜上の呼称として濱川がつけた。
- 13 ここは文脈から見て「絶対的」ではなく「相対的」でなければおかしいのであるが、『日支』の該当箇所（下巻八三頁、七―八行目）でも「絶対的」となっている。熱を込めて書いた箇所であるだけに、この二度繰り返された誤記は非常に痛いミスと言わざる

を得ない。

- 14 杉山正明は「クビライ政権は、陳朝・安南国、チャンパー、緬国（現在のミャンマー）、ジャワにも数次にわたって遠征部隊を送った。（中略）しかし、陸上進攻の緬国遠征のほかは、炎暑と疫病などのため、いずれも軍事上は撤退するかたちで終わるものが多かった。従来、これをもって、「モンゴル敗退」といわれがちである。だが、（中略）これらの遠征は、もともと征服・支配よりも、服属や来貢をうながしたり、通商ルートを把握することを主目的としていた。結果として、東南アジア海域の海上ルートを、モンゴルは直接に掌握する。モンゴル側から見れば、十分に目的は果たされていた。」（『中国の歴史』8 疾駆する草原の征服者―遼・西夏・金・元』講談社、二〇〇五年、三二七頁）としている。

- 15 父と同じ歴史研究者となり、『入宋僧裔然の研究』（鹿島出版会、一九八三年）を著わしている。

- 16 前掲注1『八十年の生涯―木宮泰彦 自伝と追憶』五六一頁。

